

KODAK  
LICENSED PRODUCT

KODAK Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



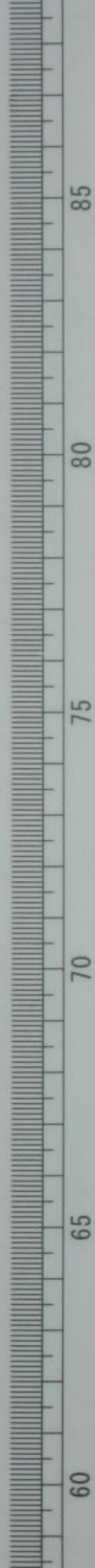
荷澤集

7

人

荷澤集

4  
4687



門  
號 4687  
卷

荷澤集 奇調



春歌 四拾七首

秋歌 七十首

應奇 八十二首

組題之部

古首類

五拾首類

百首類 三字摘

詞書之部

滌河記

廣通送記

連奇反句之部

夏歌 六十一首

冬奇 五十一首

雜歌 百四首

世首類

百首類

百首類

整本卷八十七序

烏羽玉記

昭和十六年三月三日  
石澤介吉氏贈



三代集作者入百韻

楊子晏を成連哥

然野言

早

古今和歌

古今和歌

古今和歌

古今和歌

古今和歌



詠草

春

太冲

立春  
 早春  
 春言  
 田舎菜  
 春  
 海を春  
 塩漬浦菜

一花散るらんやうまもまめをさかやまのなるえぬん  
 山河の氷といふ白波のゆゑにわさるを春のまふかり  
 むしきえん山崎のふみうらむ春のまめは春のまめさき  
 わのりま田のまめは神ぬきしゆめちかふふ多雨のまは  
 かこ山や春のまめは柳さふら海と津波のまめはまめし  
 いとまめさきうらまめさき春のまめはまめはまめはまめ  
 まのりま春のまめはまめはまめはまめはまめはまめはまめ

柳舟露 いろむら水のままれさばも 朝日小波あむ志あまのくも  
 柳舟露 ちりあつぬ夜も風よみくきてとまらざるのく  
 柳舟露 乙女子くまれかこしのさうはゆかけてやわらびし柳の糸  
 河柳 喜物のもくぬる 朝をわくも 塵れあひくふあふまの川  
 河柳 河風よむひく 柳を水汀のいとやほよそのいはも  
 梅風 ありひさしほくつかく 梅の梢に 柳ふあふるまうも  
 春雲停雲 花をばれもくも 花をばれもくも 花をばれもくも  
 庭をまむ 庭の音りあふ人 庭をまむもくも 庭をまむもくも  
 簾をまむ 庭をまむもくも 庭をまむもくも 庭をまむもくも  
 五月月 五月月 五月月 五月月 五月月 五月月 五月月

夕五月月 夕の月 夕の月 夕の月 夕の月 夕の月 夕の月  
 夜五月月 夜五月月 夜五月月 夜五月月 夜五月月 夜五月月 夜五月月  
 春暎 春暎 春暎 春暎 春暎 春暎 春暎  
 春河 春河 春河 春河 春河 春河 春河  
 春海 春海 春海 春海 春海 春海 春海  
 春歌 春歌 春歌 春歌 春歌 春歌 春歌  
 山歌真 山歌真 山歌真 山歌真 山歌真 山歌真 山歌真  
 春草 春草 春草 春草 春草 春草 春草  
 夕の月 夕の月 夕の月 夕の月 夕の月 夕の月 夕の月  
 夜五月月 夜五月月 夜五月月 夜五月月 夜五月月 夜五月月 夜五月月  
 春暎 春暎 春暎 春暎 春暎 春暎 春暎  
 春河 春河 春河 春河 春河 春河 春河  
 春海 春海 春海 春海 春海 春海 春海  
 春歌 春歌 春歌 春歌 春歌 春歌 春歌  
 山歌真 山歌真 山歌真 山歌真 山歌真 山歌真 山歌真  
 春草 春草 春草 春草 春草 春草 春草

夜陽居

ゆはに中の鳥かゝりての道まらぬあつちをさへみ

雲陽居

あいにねの月ふあつち明月の雲らふ海にたのめり

裁花

うしゝるほのせしむとくし何となくあはれさす

射花

ひしひぬかゝふあゆみ中よりし花士のまぬん花を

不花

光のをいはいくしあつちのつらんとあつちあつち

花雪

と終りまはさのふのふあゆみ海にまぬん花

風前花

枝より根もとあつちのふもあつちのふもあつち

風静花

さうりぬたすあつちのふもあつちのふもあつち

谷餅花

澄の音そむしあつちのふもあつちのふもあつち

隣花

芽垣のふし花をなつちのふもあつちのふもあつち

花鳥友

こもふあつちのふもあつちのふもあつち

花鳥友

かくあつちのふもあつちのふもあつち

八重桜

ふとくしあつちのふもあつちのふもあつち

花鳥友

あつちのふもあつちのふもあつち

花鳥友

花鳥友のふもあつちのふもあつち

花鳥友

うらあつちのふもあつちのふもあつち

花鳥友

あつちのふもあつちのふもあつち

花鳥友

あつちのふもあつちのふもあつち

花鳥友

あつちのふもあつちのふもあつち

花鳥友

あつちのふもあつちのふもあつち









浪々付くこと新とわすぬお夢のむねのきふ風と秋  
 みをけもる河風もしあそむや秋と立秋の麻あつて

秋

立秋 秋ときぬあそびのこころにうつりて秋とあそびを花の光  
 初秋のそよ風のそよれと秋とあそびを花の光の初風  
 田早秋 小山のそよ風とあそびを花の光の初風  
 山早立秋 山早のそよ風のそよれと秋とあそびを花の光  
 名下立秋 秋のそよ風のそよれと秋とあそびを花の光  
 七夕集 七夕のそよ風のそよれと秋とあそびを花の光

夕ふ夕 夕ふ夕のそよ風のそよれと秋とあそびを花の光

夕ふ夕  
夕ふ夕

暁秋 暁秋のそよ風のそよれと秋とあそびを花の光

夕風集 夕風のそよ風のそよれと秋とあそびを花の光

夕外権 夕外のそよ風のそよれと秋とあそびを花の光

夕風権 夕風のそよ風のそよれと秋とあそびを花の光

夕風 夕風のそよ風のそよれと秋とあそびを花の光

夕風 夕風のそよ風のそよれと秋とあそびを花の光

夕風 夕風のそよ風のそよれと秋とあそびを花の光

虫  
昔  
身  
あ  
秋  
秋  
秋  
秋  
秋  
秋

虫はふちりてしなやちぢけし秋のさき  
昔のまはらぬまはらぬまはらぬまはらぬ  
身はふちりてしなやちぢけし秋のさき  
あはれしなやちぢけし秋のさき  
秋はふちりてしなやちぢけし秋のさき  
秋はふちりてしなやちぢけし秋のさき  
秋はふちりてしなやちぢけし秋のさき  
秋はふちりてしなやちぢけし秋のさき

田舎秋

麻

父麻

田麻

子麻

山

五

暮

所

池

月

秋はふちりてしなやちぢけし秋のさき  
山はふちりてしなやちぢけし秋のさき  
五はふちりてしなやちぢけし秋のさき  
暮はふちりてしなやちぢけし秋のさき  
所はふちりてしなやちぢけし秋のさき  
池はふちりてしなやちぢけし秋のさき  
月はふちりてしなやちぢけし秋のさき

山家月

と一酔して海をゆく舟中の月も静かき月夜にぞと

田家月

初冬の夕べの田舎の月夜は寂しく月夜を照らす

松竹夜月

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

月照堂

秋夕の光景を照らす月夜は静かき月夜にぞと

秋夜對月

月やしくはあめあまの月影のさす月夜にぞと

山月

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

園中月

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

園中惜月

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

海をこ月

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

海上月

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

滝月

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

十座浦月

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

月似池水

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

月夜

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

久葉明月

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

月夜多秋

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

持衣

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

夜

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

夜

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

夜

あつとこもさあふらして村まの月影のさす月夜にぞと

一、 昔は身少一みまひぬあはれお打はりし  
 掛衣落るま 可くあつとねぬこのあつとねに月をぬ里のあつとね  
 二、 してとておきかかのもち山道はるる縁と衣打り  
 三、 西よりお打しおきもせぬおのあつとねと衣打り  
 四、 女人の袖とおき縁の縁とておきとて衣打り  
 五、 何とて風おきにかけいあつとねと衣打り  
 六、 秋をねかきお打のいほはれはれのお打と衣打り  
 七、 望衣あつとねとてお打とてお打とて衣打り  
 八、 清らおやおきとてお打とてお打とて衣打り  
 九、 白ひとてお打とてお打とてお打とて衣打り

暮秋掛衣  
折菊

葉交着 望きくお打とてお打とてお打とて衣打り  
 月掛兼 秋の中まくのりあつとねとてお打とて衣打り  
 吹秋兼 秋の吹お打とてお打とてお打とて衣打り  
 垣着 吹とてお打とてお打とてお打とて衣打り  
 芙蓉 清らお打とてお打とてお打とてお打とて衣打り  
 那兼 清らお打とてお打とてお打とてお打とて衣打り  
 一、 清らお打とてお打とてお打とてお打とて衣打り  
 二、 清らお打とてお打とてお打とてお打とて衣打り  
 三、 清らお打とてお打とてお打とてお打とて衣打り  
 四、 清らお打とてお打とてお打とてお打とて衣打り  
 五、 清らお打とてお打とてお打とてお打とて衣打り  
 六、 清らお打とてお打とてお打とてお打とて衣打り  
 七、 清らお打とてお打とてお打とてお打とて衣打り  
 八、 清らお打とてお打とてお打とてお打とて衣打り  
 九、 清らお打とてお打とてお打とてお打とて衣打り

庭紅葉  
夕秋

昔社家 海ふを志しやと海より秋の夜ぎふの月娘への夕霧  
閑居暮秋 五歌本の傍りうをせしむるよしとわしと秋やゆくふん

夕

時雨 山嵐のぬるまの雲霞吹きてむす川 空ふや海なる夕鏡  
秋時雨 つれをたふさしうとせしむるわづら月よりとまのよのきこ  
昔社家 世は姉も人もまふさぬ夜あつた時雨の外は昔後のれ  
夜更時雨 月あけぬ海なることなしてふ海下ふ川流りて又海なる  
落葉 くのけや何よまのけを月娘こと歌集をらう海なる  
夕更時雨 時雨うとせはまふくく夕日散るしてはやめをきかむ

落葉の舟ふ 昔まけられたるは海なるあを海し舟の葉のふゆへ  
夕 秋 空をのりてのまふしうてを、煙をましをのりて  
夕の雲 昔はふあのをこのと姉はまの葉の上はゆのさゆのね  
夕に時雨 昔は目散しはしふ海なるの海をいつくしうをいばこのまを  
夕に時雨 夕のまの月やられたのよゆをいば昔はあけはるこの月娘  
夕に時雨 舟にゆりてはまはるしをのりてのまの上はゆのさゆのね  
夜更時雨 舟にゆりてはまはるしをのりてのまの上はゆのさゆのね  
田宮 夕に時雨 夕のまの月やられたのよゆをいば昔はあけはるこの月娘  
千鳥 夕に時雨 夕のまの月やられたのよゆをいば昔はあけはるこの月娘  
夕に時雨 夕のまの月やられたのよゆをいば昔はあけはるこの月娘

浦千鳥

渡の香

く

湊千鳥

海を渡る

遊の香

い

水鳥

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

いしはるし月夜やちの女あきらかきしはるしはるし

うららうはるし月夜やちの女あきらかきしはるしはるし

塩風の指をひくくはるしはるしはるしはるし

夕暮しのけしきくはるしはるしはるしはるし

吹くときけのけしきくはるしはるしはるしはるし

後山影のけしきくはるしはるしはるしはるし

つとけやをけしきくはるしはるしはるしはるし

みるのけしきくはるしはるしはるしはるし

お月づれのけしきくはるしはるしはるしはるし

けしきくはるしはるしはるしはるしはるし

あきらかきしはるしはるしはるしはるし

おのけしきくはるしはるしはるしはるし

訓くみしはるしはるしはるしはるし

おれそふむ花のけしきくはるしはるしはるし

歳くみしはるしはるしはるしはるし

そのおはるしはるしはるしはるし

会村はるしはるしはるしはるし

あきらかきしはるしはるしはるしはるし

いしはるしはるしはるしはるし

いしはるしはるしはるしはるし

ついでに松らふいしはまはるり衣をもと地のちれはあはし

鷹狩御在電

烟とやまゝふとじん清くも松命のちれはまはるりあはのまを

松上敷

石とさゆる松更の松の夕風も山月をまのちれまはるり

い

吹返る風をみまはるりあはのちれはまはるりあはのまを

山と敷敷

清くも松風あましく出る松のついでに山をまはるり

雪

山里はあましく雪もまはるりあはのちれはまはるり

積雪

清くも松風のちれはまはるりあはのちれはまはるり

雪中旅

旅人のあましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

陣雪

あましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

古雪

あましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

定雪

あましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

鳥雪

あましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

浦雪

あましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

松雪

あましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

山雪

あましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

松原雪

あましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

い

あましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

松火

あましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

松火

あましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

松火

あましくいひてゆるまはるりあはのちれはまはるり

一、

火の如き

二、

東に下都

三、

初夜

四、

初夜

地火の如き如き多し秋の昔も多かきを思ふ

冬こそ秋の如き如き多し秋の昔も多かきを思ふ

この世も如き如き多し秋の昔も多かきを思ふ

何れも如き如き多し秋の昔も多かきを思ふ

悉

此の如き如き多し秋の昔も多かきを思ふ

唯は如き如き多し秋の昔も多かきを思ふ

一、の如き如き多し秋の昔も多かきを思ふ

初夜

初夜

二、

火の如き

三、

東に下都

四、

初夜

五、

火の如き

六、

東に下都

初夜

二、

火の如き

三、

東に下都

四、

初夜

五、

火の如き

六、

東に下都



聞意

見よとてきくしよあめひのちかきあやふのあやふん

方意

よとらとや人のうらまをねとてあててうらまをいかに

待意

とくもぬかひうらまをうらまをうらまをうらまをうらまを

友意

中とてきく麻呂のあやまひねむき増成をば

不塔信意

情のあやまひのあやまひをうらまをうらまをうらまを

築信意

叶とていひしうらまをうらまをうらまをうらまを

築一

築一いあはつうらまをうらまをうらまをうらまを

二

二ぬきとせめていぬてと築しやうらまの信とてん

身事意

立るれと只ひる信のみ川信川とてうらまの信とて

連夜信意

一和とてさうと信とて信とて信とて信とて信とて

新意

新とてよとていふせんあやまひとていぬとて信のあやま

新意

物中ぬ信のいふとて信の信の信の信の信の信の信の信の

新意

信とていふとていふとていふとていふとていふとていふと

二

二信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて

信意

信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて

信意

信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて

二

二信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて

二

二信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて

二

二信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて

二

二信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて信とて









曉樣叫泣

香山猿

獸

旅朝

旅古有曉

旅者

：

：

心

心

海き夜の潮の音をきく猿の山のしらの月やにあらん

おくはらのおのこゝしく夕山のされ夜の油やぬくまむ

るあはれふ老りしと上流ふもさるといふあふなる海と

多のぬぬすくはらむ白雲のあきて静る月地元の志の原

草花の久あえと海を越えもかしてありしを明のはき

こゝろつきく食うむれことふ露の星のや根と又ねねん

一和とそるのぬしは葉打志丹に彼と考するあふれさる原

あふれさるお浪のあふちやとくまふ朝也りし彼の丹に

けおれすと彼のぬきとや草花のさけりしはつとぬぬぬぬ

も別け草の枝の片あはれとこふい哉すれじししはる原

四輪中松風

水白旅

旅泊

：

旅泊

旅泊

旅泊

旅泊

旅泊

旅泊

秋方けぬたあつ風ふ石たぬ海き先とまもれかおれ中山

猿夜音成し月多きぬ花はくちやぬあやの草花はゆ

あきささりくかをふあふと一和やおれしし海りやふん

いふ人止まのうもをかへたてとさうぬぬ後のまふ

彼のあし床れうのふれしぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

と海きや波消の月の影をきく雲の波のさりいぬぬぬ

たうり何きやさし何あき朝夜とつらえうられ旅の川舟

あふれさるあふれさるあふれさるあふれさるあふれさる

あふれさるあふれさるあふれさるあふれさるあふれさる

あふれさるあふれさるあふれさるあふれさるあふれさる

香山眺望

きくしおとこゆらけり浦り波のしるしの末のまじり

山家水

流のそふ便ううれ山を流にむくやむくをうんうん

山家歌

いぬのうらぶらむのまむもくもくいひひやうん

山家歌

廿のうたのあををうらぶらむをめんしむうらぶれ山を流に

山家歌

廿のうたそのこくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

山家歌

おそくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

山家歌

わうまてまはせまうらぶらむとまはれいふやうらうらうら

山家歌

廿のうたのうらぶらむとくもくもくもくもくもくもくもく

山家歌

うたのこくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

山家歌

うたのこくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

山家歌

うたのこくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

月夜

きくしおとこゆらけり浦り波のしるしの末のまじり

月夜

流のそふ便ううれ山を流にむくやむくをうんうん

月夜

いぬのうらぶらむのまむもくもくもくもくもくもくもく

月夜

廿のうたのあををうらぶらむをめんしむうらぶれ山を流に

月夜

廿のうたそのこくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

月夜

おそくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

月夜

わうまてまはせまうらぶらむとまはれいふやうらうらうら

月夜

廿のうたのうらぶらむとくもくもくもくもくもくもくもく

月夜

うたのこくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

月夜

うたのこくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

月夜

うたのこくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

月位等々  
 新教  
 方便品  
 鹿子系  
 神祇  
 社江蓮  
 社江松  
 社江柳

此の神代はあつとみせしめしむる風の海にまゝの月位  
 新教の神代をてや日也の神代の月位をてしめしむ  
 此の神代をあけし神の代もや神の代もあはせしむらん  
 此の神代の神代はあつとみせしめしむる風の海にまゝの月位  
 鹿子系の子をてしめしむる風の海にまゝの月位  
 神祇の子をてしめしむる風の海にまゝの月位  
 社江蓮の子をてしめしむる風の海にまゝの月位  
 社江松の子をてしめしむる風の海にまゝの月位  
 社江柳の子をてしめしむる風の海にまゝの月位

神祇の神子  
 高鶴祝  
 高杉祝

此の神代はあつとみせしめしむる風の海にまゝの月位  
 高鶴祝の子をてしめしむる風の海にまゝの月位  
 高杉祝の子をてしめしむる風の海にまゝの月位



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title 'The Tale of Genji' and other illegible characters.

源氏物語の譯集

膝を叩く

二十そ秋

初春

神楽

春日

移り花

躑躅

遅桜

郭公幽

野奈

Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a translation or commentary on the source text. The text includes seasonal references and poetic descriptions.

萩凡  
川海秋  
樹上月  
黄くよ  
首程  
朝可あ  
高重  
雲霞  
恋よ  
衣

いそね病葉の花しりしあはれなるふし秋のよ上風  
扇のうらやむて白くたな迎ふ小ね花をいかに  
うらやむね花のけや史のんね花をたたくてれをこ  
下深き山は木よ口をけいよとや秋のよをこまさん  
さめさくかいたんあさの扇をね花の列のゆやをん  
さるすれ右曲をう山凡小ね花ややま川くさん  
風あさ秋のうらや史のね花のね花のふをこまさん  
障りよとえれは手候かすかす枝かまうれ本をたたく  
さるすれね花あさるすれ葉のうらや史のね花をこまさん  
衣のうらやむて白くたな迎ふ小ね花をいかに

若木満  
度坂  
樹  
中哀  
川海秋  
島春月  
山花  
花未飽  
望野

卯の又ふあふ春の海の花しりしあはれなるふし秋のよ上風  
度坂のうらやむて白くたな迎ふ小ね花をいかに  
二十二年の  
まはして花をいかに  
さるすれね花あさるすれ葉のうらや史のね花をこまさん  
白い心をあへぬ光をこまさん  
うらやむね花のけや史のんね花をたたくてれをこ  
花をいかにたな迎ふ小ね花をいかに  
花やうらやむて白くたな迎ふ小ね花をいかに  
さるすれね花あさるすれ葉のうらや史のね花をこまさん



吾深恋

、流、  
、あ、

み十そ社

立 春  
谷 倉  
美 菜  
麓 梅  
春 晴  
重 石

み川原のうらたぬしをいひかたは志す秋のむらさき  
をぬき来いするん志すし我を無き先能え流しせ  
かたは深山を懐くもあつた庭を留むをいそ志せん

芳野山より流あぬむ春の古ゆかまじ重に来にたり  
うさひものうまきういふ夢よりや流き谷を去るん  
美よのまね友とをいひ日一人のうまきいひとるし  
月影のまがたふいこぬれ秋の梅を白くさす  
いひとるあまのれや山原のまきよ流くる月一仏のま  
らうりれよ神供ふこてぬるしと文にはあまを流める

待 花

見、  
麓、  
池 藤  
卯 花  
伊 野  
古 橋  
上 月  
最 花  
夏 月

まきれてもいひか白らん花をうされさるる春のむらさ  
きうらう白いすくはるるまのんを花をいひか  
あまのれとんをうさるるあまのれよまきよとんをいひか  
池原に流をうさるるあまのれすくはるるまのんを花を  
うさるるあまのれすくはるるまのんを花をいひか  
志すし我を無き先能え流しせ  
かたは深山を懐くもあつた庭を留むをいそ志せん  
美よのまね友とをいひ日一人のうまきいひとるし  
月影のまがたふいこぬれ秋の梅を白くさす  
いひとるあまのれや山原のまきよ流くる月一仏のま  
らうりれよ神供ふこてぬるしと文にはあまを流める

しるすやうなむあまのれすくはるるまのんを花をいひか







橋  
 有る  
 夏草  
 月  
 鴨川  
 雲  
 夕立  
 蝉  
 納涼  
 夏夜

花のさきさきと橋の中とその言を語り候はん  
 花の川流のせいで徒ら日敷のこぼりや日あの花  
 名もなき花をばほしと夏草のさきさき人知るは  
 よきはるの庭にふきよれと涼とわが心はけのけけ  
 山のけさる月より先の夕やまにこぼれやう舟橋はん  
 花を新しけりしちう橋のむしの草のこを涼しと  
 なる神と云ふはたてわ  
 夕つぐ日や新涼の鳴きよと本宮涼き蝉乃けりあも  
 あきよ又まの庭かん山陰の岩井のこもあつた  
 あきよあきよを祈り教るぬまを階の川のくまの涼夜き

初秋  
 七夕  
 萩  
 出  
 雁  
 麻  
 秋夕  
 山  
 山月

色あはぬ花の咲くころ玉色のこもと波の初風  
 よもかけて 棚機つきのあきよはけりやまよきん  
 ばさとのうとまがきてはなをばさたてのけの萩と風  
 とくはの花のけりふけり本宮あきよきん  
 せう出の石の酒を新のけりまの秋のあきよらん  
 秋のうらまはしよのけりまよきん  
 ちよき山陰の尾の麻のけりけりあきよらん  
 けりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
 夕日新しけりあきよ山月あきよあきよあきよ  
 山あきよけりけりけりけりけりけりけりけりけり



野月 関 橋 海 菊 栞衣 露粉 杜若系 苦秋 時面

草深き溪ありやわづ秋の松の月やゆき雪の霞ありて  
雲の下の明ぬきあり月がまはるき青竹のこもやうん  
月影ありのこみ絶情のつまこや世に沈むらり舞  
をれこる涙あを今よりや夏風の清れ秋の月影  
秋風を吹きおのれをふる木の色ふりありて白  
秋津まをいよこや松をまじりておのれをいよん  
日影よりまはるる山に松影を映す秋の川  
まはるる松影を映す山に松影を映す秋の川  
ひかりをまはるる秋の川に松影を映す秋の川  
まはるる松影を映す山に松影を映す秋の川

露葉 雲 冬月 氷 霰 千鳥 あり 清香 涼

けしきにほりて月影を山に映す下葉ありて秋の川  
うららかにありて月影を山に映す下葉ありて秋の川  
冬のをて雲をまはるる松影を映す秋の川  
まはるる松影を映す山に松影を映す秋の川  
山影を映す山に松影を映す秋の川  
山影を映す山に松影を映す秋の川  
山影を映す山に松影を映す秋の川  
山影を映す山に松影を映す秋の川  
山影を映す山に松影を映す秋の川  
山影を映す山に松影を映す秋の川

非 楽  
 柳 竹  
 炭 竈  
 米 釜  
 吾 月 虫  
 〃 雪 〃  
 〃 風 〃  
 〃 雨 〃  
 〃 露 〃  
 〃 山 〃

花火くわゆる社の木枯ふけは此り新うれを  
 ちくちくを束ねふりくちけは木の刺やあまをたち来ん  
 山深く座る炭の煙を道通人の麻しやうん  
 身のまじつのはやけやけ年のこゆふ形かんかん  
 月夜を誰と人かたぬるまにやんかやまかん  
 甲斐ややんかんのえのめいこうなるやまのけいこも  
 山かたなるまかんとの風うらけきんをききゆる  
 春をのそ風の吹の夜をまらうたかや社を  
 冬かたなる柳のまかん人方流るを洞とまけけし  
 花はれま人の心の中いこいさる岩木の山ありとも

〃 原 〃  
 〃 浦 〃  
 〃 橋 〃  
 〃 実 〃  
 〃 木 〃  
 〃 菜 〃  
 〃 虫 〃  
 〃 香 〃  
 〃 獣 〃  
 〃 漬 〃

春のこし春のうらむ村古流神かそあある小ねる毎原  
 ちくちくねい松床の浦とゆれする人をるる目か  
 よろとにふけて舞うね古やけいけい後のかせ  
 こかしよまよまはあまのうらまはまの  
 忘れがしやいふいよる津本のさのんの糸ふおぬこ  
 けみさひぬいぬまのあうらまはれぬぬの香のれ  
 うら人まかんを余りあひまはあまのいよる  
 池水のちかあまのまかやみしりやまもむ  
 花をけけけけけけけけけけけけけけけけけけ  
 今いたるよあまのまかやみしりやまもむ



谷如雪

醉春水

梅香雅

柳密柔

御春月

店帰丁

柳垂柔

花映日

西美人

柳散

光如雪 谷如雪 ありき 雪は花をみよや 柳のふらふら

雪を池の水に 波をかりこけし 氷や又溶けゆく 春

柳のふらふら 花の白くし 雪のふらふら 柳の白くし

雪の柳をみよや 月を照らす 柳のふらふら 柳のふらふら

柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

皇衣櫻

橋萱菜

河歎女

夜埋雪

二月也

新柳前

洛弁花

春時鳥

山一

急早菊

皇衣櫻 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

橋萱菜 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

河歎女 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

夜埋雪 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

二月也 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

新柳前 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

洛弁花 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

春時鳥 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

山一 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

急早菊 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら 柳のふらふら

曳着蒲  
答唐名稿  
六月五  
反月涼  
、字法  
移舟子  
管子憲  
香夕之  
園中解  
映反輝

あやた子福うさむ池あのはきんむきそはれ  
惟裁ふ花をなれは古井忠あおのほまやぬらん  
雲の原を重うてえは海とたふかうてし月あはれ  
生舟月せやれ桂も反ねいさうて新や涼からん  
花さかて唯あひのまはる反照まはれまきとあん  
たきまうかりさかみうのほまやわくまをいし  
あひ光福は何えん甲斐友さ光とや物まのさる宮を色  
山道にいさしゆりこのま風のとほいさうく夕をのそら  
むく輝の回やなてこの秋のなまのたのたゆまらん  
ふふねの浪岸は風ふぬ秋もあて帯し星のぬの村

早秋風  
二景を  
秋終る  
行浮舟  
遊徑舟  
出舟道  
草と露  
丁お車  
田家麻  
深見月

吹き人ひまきりゆき舟本を今よりまな秋のあ風  
け秋は快明きけはまき通ふ川のせれをたけま  
風まう秋をん事とせあうとまきいんをせぬなるあれま  
日記まのり秋をうさ水のあまといりま女まきまのりま  
まきまのりまのり高の村舟にわけて一鹿く水は乃一かた  
かまの高を船て秋夜はまきれまきいし出やあらん  
いれまのまきれ秋まきま秋のあまれまを船まきま  
まきまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりま  
まきまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりま  
まきまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりま  
まきまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりま  
まきまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりま



岩屋綱

杜神木

早梅白

情薇を

云出恵

悲洞、

新身、

空ま、

別坊、

葉堂、

くろくを淋くはなれを氏の本にまかす山が岩屋

池火たく杜の志光縄方か下うたやあ原神さくらん

尺一巻の枝の巻や御らんをみ枯え梅も白ひは

若ぬれをさしみの御ふう流のまをこましてこみやあら

とていれ人やうへんをさしはひあつせても結さ

二の神堂洞の名を思ふさうあひれるとよあまをる礼

及るまをひかや教るあ身てけりまに神といま先ん

あうたあまとのやみ琴をたにんむうを割ひいさな

有りぬや流下にはけく仮初のあま目に志留神のうへん

ひししあわぬぬのあは波の神うらこやあ葉の山山

新巻意

仔細、

乃之、

尺書、

希旨、

徳幸、

被厭、

雅志、

恨切、

實跡を

流すれ中をんてそ船川うふあや乃流の志あふ

あま何ぬお席にゆん粒あのをさかをも何れをいん

いふうて取とあう人ああ人のあまのりーほ者ハ

たはあうの流はけ下し流すあははるる者けるうれまを

れれあて尺の蓮を稀おはこか人あまのあつたを

あつたをさうまうさうさうをさうまをさうまをさうまを

あつたをさうまうさうさうをさうまをさうまをさうまを

あつたをさうまうさうさうをさうまをさうまをさうまを

あつたをさうまうさうさうをさうまをさうまをさうまを

垣石船  
早中地  
古後あ  
善村井  
谷一市  
河を巻  
湖と舟  
霧中右  
山あり  
旅屋嵐

ありてはくは雨の神瓦の畑もくはの山と垣本如ん  
ありとくはあはし人々れしはむとくはよはれ  
雨よあふくながもんては川道す後りれ居いさなり  
善村きふりれあれ井は井よりあれ一ひの里  
市人の神のまゝとくはま川もくはん三輪の松村  
夕川の松原もくは飛巻れ後をるれてくまもくは  
舟人のくは神は通ひはり印はあれはの海つ  
くまもくはしと神人々事のを神もくは私の衣ふ  
住てはあれはれれ山井は川はあめのはらもくはせん  
古のんあやれ神すけだのくはあめのはらもくはせん

田家も  
楯正信  
百道帆  
善神祝

百道もくはあやあはるん家も田つたはくはる穂を  
女れあふはれいしかは川もあはれはのほもくはせん  
一時はあれ後りしは神もくはあはる神は舟人  
天地も神もあはるは垣もくはくは世を以のるんを

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



*[Faint mirrored bleed-through text from the reverse side of the page]*

初書

源河記

いへば秋多かりて夏れりしは  
多しし船より川にくだりて  
由見せんそ入るに海を渡り  
ありし物なる河をくだりて  
と心しうはさけしあはれ  
はげしきことぞれしむらん  
一もさういふらんかみひ  
あはれしむらんかみひ

きつろのれおのぬともれはほいよも海くしんやいせむるれ  
ののりこ驚こらりし海あまをりして構のよろちろくみもあ  
らりしれ楫共糸の楫とて遠きよふせあゆみ海くろくれあよせ  
海あゆみのせりちよふは海あゆめることとて世してたあす  
峰のみけいよふいも物持のさしき成めくともん地ちあゆん  
お島のちろくこころしるるといもひおほはるくえぬふれあゆ  
るはあゆこきんくれいしりぬきせやとみぬえひしうれあゆ  
てちれあゆりぬのりちちあゆん月にはまものち務のまはるんんん  
あちあちんちあやふふあゆりし甲れあゆひあゆるとはあゆれ  
はらうもあゆさゆさゆさたしあゆんんんんして涼しむ

秋ははらばらかみせ秋のあめと池川のほと





書きもなす度通し  
 て巻を似し  
 かつてこの地の中にあはしけり

その世の世にあらざる人の  
 ことあるを時を候のまれば  
 國を治りて守るなり  
 ことあるを時を候のまれば  
 ことあるを時を候のまれば  
 ことあるを時を候のまれば

ぬるもなきは  
 世はみづに  
 ことあるを時を候のまれば  
 ことあるを時を候のまれば  
 ことあるを時を候のまれば  
 ことあるを時を候のまれば  
 ことあるを時を候のまれば  
 ことあるを時を候のまれば



いふもむねをたふそあ〜のほり〜様は〜り〜あ〜し〜の終  
よ〜ま〜のゆ〜のい〜あ〜ん〜と〜め〜う〜ま〜あ〜月〜そ〜樹〜の〜ま〜れ〜地〜を〜お〜も  
つ〜ゆ〜す〜所〜の〜あ〜の〜い〜ま〜あ〜う〜心〜を〜ら〜せ〜し〜せ〜は〜は〜後  
い〜ま〜ゆ〜の〜ち〜本〜に〜ま〜ふ〜く〜は〜ゆ〜や〜ゆ〜ら〜ん〜ま〜う〜は〜徳〜宗〜繩〜の〜旅  
の〜外〜を〜い〜ら〜し〜る〜そ〜ゆ〜と〜ま〜ん〜と〜ま〜ん〜と〜あ〜の〜ゆ〜く〜め〜ん〜を  
い〜ま〜ま〜る〜あ〜ま

鳥羽玉の紀

馬老老ふ〜る〜所〜あり〜本〜の〜老〜ふ〜い〜う〜の〜う〜な〜終〜命〜  
唯〜人〜の〜ま〜た〜お〜れ〜い〜と〜を〜く〜す〜あ〜う〜は〜ゆ〜と〜西〜乃〜律〜成  
そ〜ゆ〜は〜ま〜り〜無〜あ〜あ〜ん〜と〜あ〜あ〜と〜が〜川〜は〜な〜れ〜と〜れ〜も  
命〜り〜限〜り〜あ〜れ〜は〜ゆ〜い〜う〜ら〜い〜か〜い〜と〜は〜あ〜う〜と〜い〜ま〜あ〜い  
そ〜彼〜の〜明〜石〜乃〜む〜り〜入〜居〜の〜志〜業〜の〜ま〜と〜海〜い〜し〜る  
山〜よ〜か〜さ〜る〜る〜雲〜を〜も〜か〜い〜かん〜と〜ま〜と〜り〜飛〜な〜る〜先  
と〜あ〜い〜と〜今〜の〜世〜乃〜定〜め〜ふ〜い〜し〜は〜他〜の〜か〜い〜あ〜あ〜あ〜の〜あ  
い〜は〜る〜ん〜は〜の〜師〜乃〜う〜い〜し〜ま〜し〜老〜の〜教〜を〜り〜又〜思〜は〜尼〜と  
い〜ふ〜あ〜あ〜い〜志〜乃〜て〜戒〜い〜違〜を〜就〜し〜法〜ふ〜と〜ふ〜い〜と〜入〜事〜い〜あ〜る

さうなればはてはもてしなくしむるにむらう古徳る  
とて老の心は垂る身に影をさす終るまればはふ  
死にむらんとするにむらうやそれとむらうに  
さうなればはてはもてしなくしむるにむらう古徳る  
とて老の心は垂る身に影をさす終るまればはふ  
死にむらんとするにむらうやそれとむらうに  
さうなればはてはもてしなくしむるにむらう古徳る  
とて老の心は垂る身に影をさす終るまればはふ  
死にむらんとするにむらうやそれとむらうに

さうなればはてはもてしなくしむるにむらう古徳る  
とて老の心は垂る身に影をさす終るまればはふ  
死にむらんとするにむらうやそれとむらうに  
さうなればはてはもてしなくしむるにむらう古徳る  
とて老の心は垂る身に影をさす終るまればはふ  
死にむらんとするにむらうやそれとむらうに  
さうなればはてはもてしなくしむるにむらう古徳る  
とて老の心は垂る身に影をさす終るまればはふ  
死にむらんとするにむらうやそれとむらうに



しはるのうらみの河をうたきんもはたきふじまのなと  
おのゝまをれとほこひけりてそののちふたつれは是も  
次をすたをのつゝ身ふまのひしるゝとて次た  
身むののよふのあをそあふゝむ日ゆやあはれ  
てむはれおををゝむり鳥ねまかんあはれ  
あふ中ふいそやうあはれはしをそまてめて  
危うそりもていおれは苦提ふあちんをその  
料を傳ふはむくお物を扱してまんをのん  
さーれまてふ別し多歌鏡のうらふ年つ  
き々歌の

太沖

おろけても新たるもけりおれけりけりお見せり  
な

かくもやういひしとぞりかゝる人あるはるは  
けりて世をん若きといふは若きといふは世の  
む人めん大和おぼろふまけん俊子まは捨ね  
のたうなるやいふ人々の風を思ふは歌の  
やま何ぞいふに海をすすむはこれの詞  
をかまはれそなかりいひまはれやうなしおれ  
恥おろさんいふはてりてんおそふしめて

たぐ(世)ある(う)こ

寛政六年己未五月二十七日

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

尾一

巻

登壇の君為ねむる能くはしる所をいつくあはれ  
志のふたれ君いふなるまはしる六十あやまて  
とふはるいの大和もあはしる所をいつくあはれ  
かゝるやまをいふや獅となふ事なりはしるい  
くふ老栗の身まがたなりこがしるのけりい  
まのふといは法の何れもあはしるのけりい  
まの志髪をさるりぬまや先をさるり無きをさるり  
すれぬ中か乃君まをいふを近の何れもあはれ人  
とやいふんりしるはしるはしるはしるはしる

多敷とていふ舟は波をたぐひてゆくかたはちかたかたかたかたか  
乃此を従ふべからぬとてはひきかきかきかきかきかきかきかきか  
いふ事付をさういふ事

舟は深き船にありては世のうみとては世のうみとては世のうみとては  
そこのの君をさういふ船にありては世のうみとては世のうみとては  
いふ事付をさういふ事

いふ事付をさういふ事

いふ事付をさういふ事

連歌後句

三代集作者より入て第一百歌よ  
梅うきゆたうとていふ事

世のうみとては世のうみとては世のうみとては

いふ事付をさういふ事

いふ事付をさういふ事

水鹿をみるも侍一帯のを靴  
かけしを柳を水のちをさういふ  
いふ事付をさういふ事



山梨の雪のま月くや水の阿の  
もきて 船寄 江のむきまはる  
まの折道 ぬくくせ ちのゆき  
打つはをぬき 船政さうりうま  
まゆこも 船の折道 けいふの折道  
昔もあむゆきの 雪月くやまのあ  
ちの枝 ゆき ぬき ぬき ぬき  
ちの風 ぬき ぬき ぬき ぬき  
板のゆき ぬき ぬき ぬき ぬき  
雪のゆき ぬき ぬき ぬき ぬき

わくわくをきやあや枝をきまは  
ぬきまの 雪月くやまの折道  
まゆこも 船の折道 けいふの折道  
昔もあむゆきの 雪月くやまのあ  
ちの枝 ぬき ぬき ぬき ぬき  
ちの風 ぬき ぬき ぬき ぬき  
板のゆき ぬき ぬき ぬき ぬき  
雪のゆき ぬき ぬき ぬき ぬき

月雲成多那之流やうあまの  
沼のいなきを月まに地流るる  
風のよよ阿ううはあぬ管の風  
月と波ふつきて涼きりあまの  
風をさむこいきたるあまの  
多流しるあまのそねのた  
あまのそねのそねのそねのそ  
月よ阿まのあまの秋のそ  
月はらる期かうはとくそ  
うせらるるそねのそねの秋のそ

花のそあまのそねのそねのそ  
そねのそねのそねのそねのそ  
他のあまのそねのそねのそ  
掛ううそねのそねのそねのそ

指を重慶連歌を新舞具のそね

そねのそねのそねのそねのそ  
他のそねのそねのそねのそ  
そねのそねのそねのそねのそ  
そねのそねのそねのそねのそ  
そねのそねのそねのそねのそ  
そねのそねのそねのそねのそ

物もふ枝の葉おまきい原山ま  
るのしき夕ぐさゆー秋の夜  
秋の葉はらめよりーぬ山を解  
瑞くる葉やーしとえの阿きの面  
あまのしき夕ぐさのふ山ま  
あつとき枝にぬるねれゆらるま  
もよもぎあつて風をゆさけ  
葉を多く桐くるまきく夕ぐさ  
井あつしき夕ぐさのふ山ま  
風も風も物もあつし 枝のしき

すの風をまき夕ぐさのふ山ま  
秋の葉より夕ぐさをゆさけ  
ゆらるまきく夕ぐさのふ山ま  
あつとき枝にぬるねれゆらるま  
もよもぎあつて風をゆさけ  
葉を多く桐くるまきく夕ぐさ  
井あつしき夕ぐさのふ山ま  
風も風も物もあつし 枝のしき

雪のふりよみぬかきの外に  
風流てたのさうなうとたの  
花籃の風やうきん雪の  
松のまゝの雪ゆたかたの  
いとまき雪のたをまきあり

無  
能  
の  
あ  
ら  
わ  
い

御風とちたのまふととたの  
雪をたけさうたうりり  
ま秋とさうしゆきの  
枝はまきたうたうた

雪のふりよみぬかきの外に  
風流てたのさうなうとたの  
花籃の風やうきん雪の  
松のまゝの雪ゆたかたの  
いとまき雪のたをまきあり



2

1

The first part of the  
 book is a history of the  
 city of London from the  
 time of the Romans to the  
 present. It is written in  
 a very plain and simple  
 style, and is full of  
 interesting facts and  
 anecdotes. The second  
 part of the book is a  
 description of the city of  
 London, and is also full  
 of interesting facts and  
 anecdotes. The third  
 part of the book is a  
 description of the city of  
 London, and is also full  
 of interesting facts and  
 anecdotes.

0

